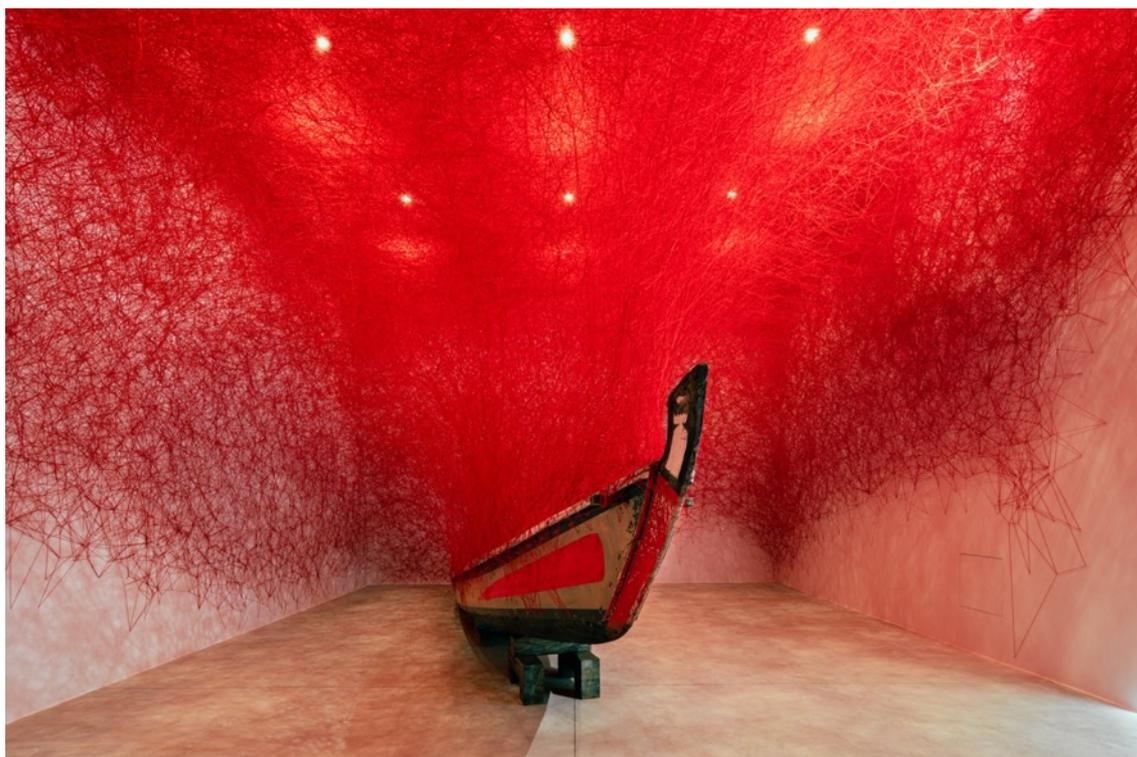


1. 十和田での《水の記憶》は、何をテーマに制作されましたか。

作品をつくろうとしたときに一番最初に頭に浮かんだのは十和田湖です。今回の展示のために新しい船を作るのではなく、実際に十和田湖で使われていた、生活感が残っている船があれば、それを使いたいと思いました。作品の赤い糸を編んでいるときには、船の記憶を編み込む気持ちもあり、この船は誰が使っていたのか、どこに浮かんでいたのか考えながら、十和田湖の水を糸で表現しようと思っていました。



《水の記憶》十和田市現代美術館 撮影：小山田邦哉

2. 塩田さんは作品を制作される際に、事前に現地を調査してから作品を構想されていますが、コロナ禍によって十和田で調査ができないなか、どのように作品を構想しましたか。

私は、作品のプランを考えているときに夢を見ることが多く、現実とは異なる次元で作品を構想しているときがあります。実際に現場を見ていないと、夢の中の構想時間が長くなって、その中で船をどう浮かばせるか、編み方をどうするかについても考えていました。今回ドイツから日本に来た際に、大阪の実家で 2 週間の隔離生活を過ごしました。実家のすぐ後ろに久米田池という一周 3 km ぐらいの大きな池があり、その池にぽつんと船が浮かんでいたのです。その船を眺めながら十和田の作品の糸を構想していました。

3. 実際の十和田湖と夢の中のイメージとのつながりはありましたか。

実際の十和田湖は空がすごく広くて、見る位置によって水の色が変化し、波も穏やかでした。本当は十和田湖を見てから、この作品を作りたかったのですが、今回作品を作ったあとに訪れた十和田湖のイメージは夢の中のイメージとつながる部分もありました。

4. 今までの作品でも糸をモチーフに制作されていますが、糸にどのようなイメージを持たれていますか。

私は、ドローイングの延長で、3次元に絵を描くための線として糸を使っています。その糸が時々絡まったり、切れたり、張り詰めたり、緩んだりというのが、人間関係にも置き換えられます。自分の心を表している鏡のような素材だと思って、糸を使っています。



《水の記憶》十和田市現代美術館 撮影：小山田邦哉

5. 2012 年から、船をモチーフに作品を制作されていますが、船に対してはどのようなイメージがありますか。

私は大阪出身ですが、両親が高知出身だったので、夏休みになると必ず高知に帰っていました。大阪から船に乗って、一晩船の中で寝て、朝8時に起きると高知港に着く。船で旅をすると、次の朝は異国に着くというイメージがあって、子どもながらにすごく楽しかった。高知に着けば両親は土佐弁になって、言葉も方言が出て変わってしまう、それがすごく面白くて。

乗っていたのは大きい船でしたが、海が荒れると揺れて、船がひっくり返ってしまうと死んでしまうと思っていました。いつも死と寄り添っている船という乗り物が子どものころから好きでした。

6. この作品は、船の中から湧き出すように糸が編まれていて、天井を埋め尽くし、壁面まで広がっていますね。展示空間にどのように糸を編み込んでいますか。

システムの的に三角を描くような感じで糸を編んでいます。糸の一本一本が目で捉えられなくなったときに完成した気がする。糸が糸でなくなったときに、やっと自分が表現したかった世界が見えてくるように思います。見えない何かを求めているような。アートは視覚芸術ですが、何か目に見えてるものは糸ではなく、糸の向こう側にある世界を見てもらうには、糸でなくなったときに初めて見えてくるのかなと思って編んでいます。



《水の記憶》十和田市現代美術館 撮影：小山田邦哉

7. 湖底に沈んだ船のようにも、湖面に浮かんでいる船のようにも見えますが、どのようなイメージがありますか。

展示室の奥から船が出てくるような形で作りたいと思っていました。そこでどんな形で糸を編んでいけば、水の中から船が出てくるような感じになるのかを考えながら編んでいました。

8. 制作の様子をみていると、塩田さんの手が糸に導かれるようで、手の動きをまったく目で追わずに制作しているように見えました。その様子から、塩田さん自身の考え方と作品が徐々に切り離されていくように感じました。

作品を作るときは、自分の幼少のときに体験した船の旅とか、自分のプライベートな問題がテーマですが、それでは作品を見せたときに誰も共感しないものになってしまうと思っていて、制作するときは自分を取り離して他者になろうとしています。私（塩田）から、あるとき私たちになって、それがまた、見た人によって私（見た人）に戻るといふ。なので、私自身は他者になって、もう一人の目で作品を作っています。

9. コロナ禍で展覧会が延期になったり、チームで作品を制作することが難しくなりましたが、その間、どのように作品を制作されていましたか。

いつも展覧会などのために半年間は家を離れていますが、去年（2020年）は10カ所ぐらいの展覧会が延期やキャンセルになったので家にいました。でも、それによって何かができなくなるのは嫌だったので、「コロナのおかげでこれだけできた」というような生き方をしたい、考え方をしたいと思ってドローイングをずっと描いていました。気が付いたら300枚描いていて、そこからはもう数えていないです。

10. ベルリンを拠点にすることで、ご自身で変化したことはありますか。

私は24歳のときにドイツに行きました。私は遠くに行けば行くほど自分が見えてくるのですね。海外に行けばより制作しやすくなって、人種が混ざれば混ざるほど自分が日本人ということも分かってくる。アイデンティティーがを見つけやすいので、海外に住んでるところもあります。

11. アーティストになるきっかけは何ですか。

実家は木箱を制作する会社でした。リンゴ箱や大きな魚の箱など、箱を1日1000個も機械で作る工場を営んでいました。その工場の中で人が機械のように働いている情景を見るのが嫌でした。それを見ながら、1個作ればいくらになるという世界ではなくて、自分ももっと精神世界に行きたいという思いで絵を描いてました。

12. 一度絵を描くことをやめられていたと聞いてましたが、今絵を描くことに関して何か変化はありましたか。

一時、何を表現しても誰かのものまねでしかないと思って絵を描けなくなりました。その後、インスタレーションを制作し、10年ぐらい絵は描けなかった。自分が癌になって、治療をしているときに、10年ぶりに絵を描きたくなって、クレヨンで絵を描きました。そのときに、絵は技術で描くのではなくて、心で描けばいいんだという気がして、そこから日記のように描いてるときがあります。

13. 最後に

猪熊弦一郎さんが「美術館は心の病院だ」と言っています。メンタルホスピタルだと行きにくいですが、少し時間ができて、ちょっと美術館に行って、作品に触れて、「作品のこの気持ち分かる」と思いながら生活すると、犯罪とかも減るんじゃないかなと思っています。

言葉にならない感情や心の葛藤がインスタレーションになり、私のようにうまく言葉を伝えられない人が作品を見ることによって、その葛藤が緩和される。美術館というのはそのような場所であって、共感が持てる作品がいっぱいあると思います。

(インタビュアー：見留さやか)

水と糸と漂う船

船を用いた一連の作品は、塩田の代表作の1つである。初めて船をモチーフにした《私たちの行方》は、2012年に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で展示され、その後、形を変えて第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展（2015年）でも展示された。塩田は2010年の瀬戸内国際芸術祭の際、豊島で出展作品《遠い記憶》を制作した。岡山から豊島への移動のため頻りに船を使った生活が、子どもころ大阪から両親の実家がある高知に船で行き来していた経験呼び起こし、船をモチーフとした《私たちの行方》が作られたのである。

《私たちの行方》の船の作品は十和田の《水の記憶》とは異なり、糸ではなく水が使用されている。2艘の船が置かれ、天井から細かな水が船に降り注ぎ、船の板に開いた穴の間から水が滴り落ち、船の周りに波紋が生じている。作品の構想を描いたドローイングから船の周りにただよう水に心をひかれて作品を制作していたことが感じられる。船は水面から浮き上がり、上部から降り注ぐ水は船体を通貫し、染み付いた記憶を洗い流していくようにも見える。ここでは使われていない船が夢く感じられる。

一方、十和田で展示している《水の記憶》は、水を糸で表現している。糸が船の中から壁面や天井に向けて空間を埋め尽くすように編まれている様子は、船に染みこんでいる記憶が船から溢れでて、使われていない船に逆に命が吹き込まれ、船が赤く燃え上がっているかのようなようである。

塩田の船の作品では、忘れ去りたい記憶、洗い流せない記憶、閉じ込められていた記憶…それらが、水や糸を媒介して見る者を覆い尽くしていくようだ。

見留さやか

作成日：2022年3月